

Title	弁証法における他者の役割 II : 相互主観の水準における否定性について
Sub Title	De la negativite au niveau de l'intersubjectivite
Author	水野, 道夫(Mizuno, Michio)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1974
Jtitle	哲學 No.62 (1974. 3) ,p.1- 25
JaLC DOI	
Abstract	<p>Dans la coexistence de la regard avec les yeux, l'apparition pleine du regard de l'autre, m'indiquant l'exterieur, me fait etre conscient d'etre regarde. Alors ce regard me fait disparaitre les yeux de l'autre ainsi que l'espace ou la distance entre moi et lui, de telle sorte que rien ne me separe de lui et que la continuite presque complete s'etablit entre son regard et mon exterieur. Le recul plein de son regard, d'autre part, me fait apparaitre ses yeux comme son exterieur qui s'etend jusqu'a son corps. Il s'agit done de la dualite de rien derivant du regard avec quelque chose derivant des yeux. Puisque rien ne separe entre rien et quelque chose, il en resulte que la separation entre la conscience et le corps dans l'autre, entre la conscience pour soi et celle pour autre, entre son regard et mon exterieur, doit etre imperceptible. Il en est de meme de l'espace comme le signe de cette separation. De cette qualite neutre de ce rien apparait la negativite sous la forme "Les yeux ne sont pas le regard" ou "Je ne suis pas mon exterieur". L'etre conscient se trouve suspendu dans cette dualite affirmative ainsi que negative de rien. C'est cette separation imperceptible qui fait exister la distance ou la quantite limitee par le regard. Cela resulte, par exemple, de ce que le corps conscient vise a reconstituer thetiquement ou pas a pas la totalite qui se trouve limitee par le regard non thetique. Mais le corps conscient, caracterise de nature par la dualite delicate de l'identite avec la difference, tend a la discontinuity dans la realisation de la totalite continue formee par le regard. Enfin l'espace, developpe par la conscience et limitee par le regard de l'autre constitue la quantite determinee. En effet c'est la forme qu'on me regarde dans les yeux et qui me detretermine comme, pour ainsi dire, etre-en-soi, tandis que la conscience, se developpant contre la forme determinant, essaie de se realiser comme la quantite.</p>
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000062-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000062-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 弁証法における他者の役割 II

相互主観の水準における否定性について

水 野 道 夫

## I

否定は 長い間弁証法家たちによって 余りにも無造作に 濫用されてきたように思われる。観点のとり方の曖昧さが 否定を極めて多様化し、時には肯定と見分けることすら不可能としているような場合もあったにもかかわらず、観点や それが立てられる水準の差異は さして明確にされようとしなかった。このことは 否定の背後で 時には暗々裡に 時には顕在的に 無が 根拠として含まれていたため、この無が 存在せしめられた無から 容易に存在に移行する傾向をもったところで しばしば現われた。勿論存在一般が その一般性ゆえに 無に移行することもあった。けれども 最も注意しなければならないのは 殆んどの場合 存在と無 肯定と否定 同一性と差異性という表現をかくして 対象の諸関係のうちで 移行が 変化や運動の下で 無定義のままに用いられてきたことである。こうした古典的な移行は 存在と無、肯定と否定とが 常に左右対称的な対立関係のうちに 固定化される傾向が強かったところに まず由来した。というのも形式論理的な否定の左右対称性を 存在の無に対する優位性に依拠して非難することができるにしても、この優位性を 存在のうちに現われてくる無が形成する運動におき代え 更にこの運動を 再び対称的關係に向けて導くところまでいったからである。観点をコギトに据えて サルトルは この汎弁証法を防ごうとした。無を徹底して存在に依存せしめることにより 否定を意識の水準でのみ定義することにより 彼は 存在と無、肯定と否定の相互置換性とでも呼ばれることのできる移行

を一応は不可能に見えるようにした。けれども 現象存在のうちにそれが指示する意味を 同一性原理としての即自存在として把握し、この即自存在ではないかぎりでの存在として 差異性原理たる対自存在を導き出すことによって 時間の構成に関しては 一定の成功を収めたけれども、世界の空間性を 外面性という それ自体が体系にとって外面的な概念に還元しなければならなくなった。即ち 意識内部での否定性の先に指示や意味としてめざされた即自存在には 最初から非存在と化す傾向があり この傾向が 空間に外面的無を附与し そこに現象する事物の相互関係には 外面的否定を 即ち存在でも非存在でもない いわば外面的存在を附与した と考えられる。肯定と否定との相互関係における 左右対称的移行は この外面性を残したため 徹底して排除されることができなかつた。同じことが 私と他者との対立概念の古典的伝統に対する姿勢のうちに見られる。一方では 対自から対他を 徹底して排除しようと努めながら 最初の無や否定の導入に際して 対他＝即自性を持ち込んだために 私の内部に他者が しばしば顔をのぞかせ 本来他者に属する領域を 私の領域または意識存在に先立つ外面的普遍性に還元しなければならなくなった。そこで 外面性は その他者との関連性 あるいは相互主観との関連性を奪われて 宙に浮き 空間 運動 変化 力量は勿論 価値や道具性までが 相互主観の水準における弁証法的関連性を失って 対自の単純で平板な世界に閉じ込められることになった。

先述したように 弁証法の操作に際しては もしとられる観点の位置づけが不明確であれば相対する両極間での移行が 極めて容易になり いわゆる空論に陥り勝ちとなる。殊に出発点の概念が 先立つ弁証法の操作の結果であるならば この操作は 後の体系のうちで十分に正当化されなければならないだろう。サルトルがしくじったのは 正にこの点であり 現象存在から導出した存在と無が 必ずしも 現象自体を説明することができず 記述と論述が混同されて それが拠って立つ観点が 他者と私との

間を 揺れ動いた。勿論 自己欺瞞や心的反省の章では この2つの観点の明確化にある程度成功し 安易な2極間の交替を不可能にした点は 評価されなければならないだろう。けれども 他者のいきなりの対象化が 対他の論述に際して現象を無視し 措定 または定立の意味を、したがって 否定の暗々裡な現われと 定立的な立て方の関連性を 等閑視し 結局は否定の対他的な面を樹てることを不可能にした。ところで 否定性が 差異性の只中において 何物でもないものとして現われ 同一性との比較において 定立的に捕えられるようになるのであれば あるいは 否定を立てることが同一性のふところに差異性を導くことになるのであれば 否定は まず何物でもない現象として 次いで概念として差異性と同一性との関連において考察されなければならない。そこで こうした現象が 微妙に関わり合っている運動の場合からはじめて これらの相互関係のうちで 問題点がどこにあるのかを見てゆこう。

運動は その形式面を強調すると 個々の背景を次々に変えてゆくところから 背景の個別的なものとの対応の 差異性の連続的な生起のうちに捕えられる。けれどもここで背景に連続性を保証しているのが 動体の同一性であるところから この同一性を強調すれば反対に 動体の即自性が 前面に現われ 背景との関連性は後退し 静止に還元される 危険性をもつ。前述したように 措定する ということが 個別的なものを その背景から切断し 他との連続的なつながりを 断ち切って それをそれとして立てることを意味している とするならば 動体は正に 自らそれを実現しており この意味では、動く物体程個別的に捕え易いものはない と云うことができるだろう。けれども そう見ること自身が すでに運動の連続性を 抹殺することにならないであろうか。動体を 走行中の車や 飛ぶ鳥として捕えることが 典型的に示しているように 措定は 背景との関連を失った動体の単独な存在を強調し 運動を2次的な面に後退させる。そこで 動体を措定することは運動を静止に還元させようとする試み

だ ということになる。静止化された運動は、更に強調されて《走行中の車があった》《飛ぶ鳥がいた》という表現となって 運動の前と後 または将来と過去とを捨象して 瞬間のうちに広く拡がった無時間性 無運動性を帯びて 状態へと還元されている。運動を 動体が描く軌跡としての形の上で捕えることも 同様に運動の本来性を破壊する。たしかに 形はそれを捕えるには 眼球運動を 再現するためには 眼と手の運動を繰り返すから 多少なりとも その本来の姿をとどめてはいるが 空間的状态におかれて瞬間的な拡がりのうちに拘束されているかぎりでは むしろ静止に近いと云える。

そうして 動体の強調は 措定を 措定はまた《がある》 《が存在する》と云う表現を導いて 静止に向う以上 動体から体を捨象し それ自体が大きさを含まぬ動点と見做し、それが他方での多数性をなす背景上の各々の点に対してとる関係を つまり双方の系の関係を問題とすることが運動の本来の形式を 正しく保存することになるだろう。実際遠く海の彼方を徐行するように見える舟を 観察する際 観察者の意識にしばしば起るように その大きさを問題とすることは 運動を無視し 運動を観察することは 大きさを捨象する。つまり大きさを問題とすることは 運動を静止に還元し兼ねない。したがって 多少なりとも 大きさが問題となるような点 その無限集合が 有限な大きさを形成するような点は 排除しよう。すると動点は 何物でもないもの 即ち同一性自体となる。けれども こうした仮定は 動点に対応する背景上の位置をも 何物でもないものとし 背景は 何物でもない点の集合となり 2点AB間で まず背景自体が 距離を失うことを意味している。そこで止むを得ず再び無限小な不可分点を取り上げることができそうに思える。けれども この考え方を移行させること自身に 問題がありはしないだろうか。即ちこの移行は何物でもないもののふところに何物かを 同一性のふところに差異性を突如として導きだすことになるのではないか。そこで 近代が編みだし

た 何物でもない何物か という無限小点は 同一性と差異性 非実在と実在との間にあつて 連続性と不連続性を兼ね合わせた 妥協の産物である。と云うことができるだろう。

つまり同一性は 先立って静止を 差異性は先立って運動を前提とし また非実在から実在への移行は 無からの生成を意味している。そこで位置や動点を問題とすること自体が、連続性を破壊するところから 運動を不連続の上で 考えることが 要求されることになる。つまり 何物かである動点が 位置A点から そこに何物でもない空隙が距てているB点に移行すると考えよう。けれども 空隙は何物でもなく したがって距離をもたず 動点は 移行することができない。あるいは 動点の移行は何物も距てていないAB間に距離を生みだす と考えなければならないのだろうか。事実ポワンカレの表現 $A=B$   $B=C$   $A \neq C$ を引用した際サルトルは そう考えていたようにも思われる。

こうした困難は 純粋な連続性を考えることも 純粋な位置点を考えることも不可能であること したがって連続性を不連続から再構成することが不可能であることを示している。つまり点が あくまで単位であるならばそれは 基準点としての出発点や到着点しか意味することができないし また動体がになうと考えられる運動形式を 反って破壊し兼ねず 同様に無限小の不可分点は 無限分割という運動の果てで 極限的な静止点を意味して なお その先に大きさを通じて 差異性の余地を残している と考えられる。連続性の一元性にこだわれば 生成を持ち込むことなしに 何も構成することができないのかも知れない。事実 意識存在にあつては 距離は 時間的にも 空間的にも 生成と消滅の間を往き来する。連続と不連続との橋渡しにあつては 何物でもないものが どうして 何物かに変じてゆくのか、何物も距てていないAB間で なぜ移行が 距離を生みだすのか、つまりなぜ非実在から 実在が現われてくるのかが最も重要な点である と思われる。けれども 困難を引き起した原因の1つ

に 措定することを認めるならば 連続の一元性を棄てて連続と不連続の二重性を はじめから定立すれば 非措定的意識と 措定的意識の一元性の下で 考察することも可能であろう。サルトルが述べているように 何物でもない分離するものは 見ようとすれば消滅し 見ようとしない時に 姿を現わしてくるからである。事実 運動や 時間の連続性は 措定しようとしなければ 歴然とした明瞭さを具え 厳密に措定された位置点を考えなければ 何の困難も起きて来ないだろう。したがって 非措定的な水準にあって認められたものが 措定的には なぜ破壊されるのか、あるいは措定する意識とは 何であるかが問われなければならないであろう。

一般的には 非措定的水準においては すべては 全体として連続して与えられている。そこには 肯定と否定 同一性と差異性等の明らさまな定立は 見られない。反対に《がない》こと 《ではない》こと は日常において 不意の驚きや困惑を伴って 確認されるように 一気に意識を 措定的水準に引き込んでくる。それは 多くの場合期待に対する実際上の出来事として 当然に対する異常また不意の出来事として 《あっ財布がない》《約束した恋人が いない》等という表現から更に 歩行中突然つまづいた穴ぼこや うまく結果をもたらさぬ機械の欠陥等非措定的意識の連続した流れのうちに 突然の中断を引き起し、そこで欠如が 欠如としてあらためて措定されることになる。肯定は こうした否定 または欠如を 少くとも暗々裡に前提とした上で 確認される。それは 存在について述べられるにせよ 同一性について述べられるにせよ 非存在または差異性の心理的可能性を含んで定立されている。云えかえると 同一性は差異性の 存在は欠如の 肯定は否定の 不断の恐怖感に付きまといわれて 定立され 差異性 否定 欠如は 水準を異にする意識の 非措定意識のうちから 常に表立って現われようと待機しているかのように思われる。事実 ここで水準の差異性は一方での肯定と 他方での否定と云う

形で現われる。ここにはない財布は どこかにあり ここにはいない恋人は どこかにいる。つまり 財布や恋人の運動 または移動が 一方における存在と 他方における不在を示している。あるいは 期待と実際との差異性の場合であれば あるべきである将来と ない現在との間において水準の差異性が見られるであろう。またあるいは 《ぼくは 勇敢ではない》等というような 他者の規定する私に対して 私自身との差異性を主張する場合もあるだろう。すると こうした否定と肯定は 水準における差異性の意識がとる表現であることになり この差異性こそ 反対に非措定的意識の措定的意識への移行 連続性から不連続性への 突如として起る転換を説明してくれそうに思われる。この差異性は こことあこそ 今と過去又は将来 他者と私との間で生じている。それはまた 運動や時間における前後の分離をも説明してくれるであろう。即ち意識の1体どこで 何物でもないものが何物かへ転換するのであるか。そこで この分離が 明らさまに捕えられる出発点を まず他者＝まなざしと 私の存在との関係のうちにさがし求め、次いでそれが量や形体となって 現われてゆく過程を追ってゆこう。

前論文で指摘したように 他者のまなざしが 私に 私の存在意識を与えるためには先立って 私の内部感覚や欲望 あるいは感覚の二重性などを通じて 私が 私の前存在意識とでも呼ばれるべきものに到達していることが必要である。けれども 前存在意識は存在意識ではない。というのも 内部感覚等においては すべては 非措定的にしか意識されることができないからである。例えば 悲しみや不安ですら それが明確に意識されるためには 意識存在が 自己をその状況との関連において 多少なりとも他者の観点から捕えることが必要である。したがって 純粋な対自は ただ暗々裡に意識されるだけであろう。けれども この前存在意識は 他者のまなざしのうちで 一挙に変容を受けることになる。それが 私に浴びせかけられる時のまぶしさは 私の前存在意識に働きかけて その外



部をあるいは新たな存在を一挙にそして全面的に指示する。私は ただ見られることしか意識することができない。まぶしさ あるいはまぶしさの意識は それ自体絶対的な出来事であり 決して捕えられることができない何かである。それは 見られることの意識と一体であるから 見ようとすれば 直ちに後退してしまう。その後退とともに そこに眼がとって代わっている。それは まぶしさを与えることなく そこにある。再びまなざしが戻り 眼はかくれ、私は見られていることの意識に帰る。続く段階で 私の意識は 前存在意識と新たな外部性についての意識との二重性めぐって 生じてくる。つまり意識の二重性は 二重性についての意識となり 他方この二重性を契機づけたまなざしを 私の外部即ちその眼のうちに見出すことになる。私が そのまなざし=眼ではないこと 即ち私の外部に 他の意識存在のいることを知ることができるのは 私が 私の二重性を存在させる意識であるためである。まなざしと眼との交替は そこで私に 私の存在意識と 他者=眼とを 代わる代わる出現させる。ここで まなざしの場合としての眼は 意識の場合としての身体を指示する。彼は彼のまなざしの向う方向に ある一点に焦点に合わせて 手足を動かしてそこに意識をまき散らす。それは更に 私に関係して 私の新たな外部を教えるだろう。眼において裸かであった意識は 他の部分では その多様な動きのうちで いわば半裸体となって現われている。すると今度は 眼や身体の不透明性が まなざしや意識の透明性を 対照的に際立たせる。何物でもないまなざし=意識と 何物かである眼=身体とは 実際には重なり合って ともに捕えられるであろう。すると 身体とは 何物でもない何物か、欠如の滲透した存在として映じてくる。欠如が強調されれば まなざしや意識が 運動を生成し空間に自己を展開する。反対に まなざしや意識の後退の下で 存在が 強く表われてくる。他者のこの過程に 私の欠如と存在の強調が それぞれ対応する。ボクシングの試合等で見られるように 他者のまなざしや手足の動きは 私に 私の外部存在を示し

私の空間を凝固させ 私はその防禦を強いられる。私の攻撃は反対に私の空間を拡大し 私は 相手の空間を狙って そこに相手の身体を全面的に引き出し まなざしや意識を後退させる。ところで まなざしは眼ではなく 私の外部存在は私ではないことは 明らかに思われながら、一旦この否定または分離を注視しようとするとき 姿を消し 暗々裡な態度をとると現われてくる。たしかにまなざしは 眼を私にかくす。けれどもその後退は消失を意味せず 眼の中心部にとどまり 弱々しく輝いている。他方まなざしのまぶしさは 見られていることの意識 つまり新たな存在意識と1体をなしているから この存在と意識との間で 分離は直接的には現われない。同様に 手を それが拡げる運動や それが生み出す空間から どうして分離し切ることができるだろう。実は この何物でもない何物かの只中における分離と非分離こそ 意識存在における否定の微妙な役割を 明らかにしている。

けれども こうした論述は 実は先立つ幾つかの考察を 飛び越している。分離や これに基づく私や他者の存在は 二者間で確立されることのできない普遍性を具えている。経験的な水準における意識や認識の展開こそ 原理上の分離や存在を導きだすことができる。即ち私と他者 私の新たな外部存在と他者のまなざし 私のまなざしと他者の身体 私の外部と私の意識 他者のまなざしと眼との間にあって 一方での連続性に対し 不連続性は かすかによみとられる。このかすかな亀裂は 他者が1人から2人 更に多数から不特定多数一般にまで拡大されて はじめて明確な分離となる。丁度運動において 2点A Bの区別が そこに生成される距離を媒介にして はじめて明確になったように 身体=意識が展開する空間が 独立した媒介となって働く時 はじめて 私と他者との間で 分離は明瞭となり この分離から出発して 他の幾つかの項の間で 連続と不連続の二重的関係も明らかになってくる。

ここで 第一の他者と第二の他者 更に第三の他者との間で 区別が

どのようになされるであろうか。つまり他者における1から多への分裂の展開の仕方が問題となる。見られることの意識と相関的なまなざし自身にも 眼=身体の不透明性にも 個別的な差異は現われてくることができそうにもない。むしろ 区別は 全体的に 私に新たな存在を附与する他者意識のあり方から 生じてくる。つまり他者とそれが生み出す私との関係の個別性である。ある関係の仕方とは異なった別の他の関係の仕方は、異なる別の私の側面を現われさす。関係=接触は ここに従属=私をそこに母を 関係=反感は ここに教師=私を そこに学生を 関係=親和力はここに男=私を そこに女を 現われさせるだろう。この水準においては 私は 対他=関係を 存在せしめるというより それを生き かつ経験すると述べるべきだろう。存在は むしろ指示され 次いで他者とともに消失してしまうからである。こうして他者は 関係の差異性のうちで多へと分離する。反対に 他人の顔が しばしば覚えられないことが起るように 関係=不在は 他者を個別化しない。この個別性を通しての 多への分離のうちで 私は 私の外部性 あるいは関係の場の恒常性や同一性を 確認してゆくであろう。ここで 多数なる他者の各々に対して 私の関係の場 あるいは関係系は 常に他者に依存して従属的に現われる。けれども 一旦この多数性が 無数性に移行するならば、即ち不特定で未知の どんな他者をとっても 同一であるような関係系が 確立されるならば、多数ではなく全体的な他者一般が 知られるならば、従属性は一挙に独立性に変わるであろう。即ち私は どんな他者に対しても 常に私の関係の恒常性に支えられて 積極的に働きかけることができる。丁度幾人かの女性との受動的な関係を通じて 自己の男としての関係系を知った若い青年が 今度は反対に能動的に この関係系を通じて 女性に働きかけるように 知られた同一性は どんな他者をとっても という仕方で他者一般に働きかけることができる。この過程は ここに対して立てられたあそこが 別々のあそこに分裂し、更に数多くの 次いで無数のあそこ

に対して 常にこの同一性 恒常性 独立性を指示し 私を帰すう中心として指示することと 全く対応する。それは また同時に 時間における今の確立とも対応する。恒常性は そこで私に 私の帰すう中心性の恒常性ともなって、私の上下 左右 前後が 私に対して位置する他者には 下上 右左 後前となること 私は他者にとっては君であり 他者はその帰すう中心として私であること等 言語 表情 身振り 他の多くの約束事の恒常性として捕えられる。あるいは 私がどんな他者に対しても与える印象 即ち粗雑さ 気の弱さ 性急等も 性格という恒常性の下に 私の外部として知ることになる。

ここで 分離は どのように実現されたであろうか。まず第一に 他者のまなざしの下で存在意識として現われたこの関係系は 必ずしも 存在の恒常性を 附与されているわけではない。なる程 他者との実際の関係において それは 常に存在せしめられる。けれども 内部感覚や 欲望や 感覚の意識 及び意識していることの意識のように 絶えず私を 指示しはしない。その意味では この関係系は 依然として他者一般に依存しており 私は これを絶えず存在させ これを生きなければならない。内部的なものであれば 私は 苦痛と快よさ 喜びと悲しみ 空腹と満足を 決して とり違えたりしないであろう。けれども 関係系にあっては 右と云われて つかつにも左を向き 言葉をとり違え 頭をかくして尻をかくさずにいるようなことが 往々にして起きる ということからも知られるように 意識と意識されるものとの間には 微妙な分離が潜んでいる。反対の場合であれば例えば苦痛が苦痛意識であり 欲望が欲望意識であるかぎりでは 苦痛や欲望は意識から分離されることができず両者の間は 直接的である。これに反して 関係系においては その各項は、例えば言葉が言葉の意識ではないように 私の意識との間に かすかに分離を含んでいる。私は 他者と新しい関係を結ぶ度毎に 新しい関係の仕方を 対他=私のうちに生みだす。この仕方は 例えば 能力や傾向の特定の形態

あるいはその拡がりとして意識され 私は これを あたかも器具や植物を丹精するかのよう に 大切に育成し 発展させ 保存する。それは、相互主観的な関係 即ち形体 量 サイン 言語等が 実際に住む場として 記憶 想起 整理 想像 アーティキュレーション等の能力として 捕えられることもできるだろう。病いに際しては 丁度故障した機械のように 私の意に反して その働きを弱める。時には私のものとも思われるこの系は 全面的に私の意識に依存して 生みだされるために 独立した系となることもできないし、基礎的な中心部すら欠いているように思われる。私たちは 左右を区別することができるのに その分岐点は認められることができず、それはむしろ欠如して そのあたりに空虚な一帯を構成しているように見えるにもかかわらず 欠如は 欠如であるがゆえに 捕えられることもできない。それと全く同様に 関係系は 帰すう中心として 常にここから出発して 無数のあそこへと拡がる 順序立った方向性を具えているにもかかわらず その中心であるここは 常に欠如として 見られることができない。といって 多様なあそこに指示されている ここ、あるいは かってや いつか がそこを中心として拡がる今は非措定的意識には明らかに映じている。けれども ここや今は見ようと努めれば 途端に消失してしまう。要するに ここや今は 何かであって 何物でもない。私たちのうちにあつてこうした欠如と存在の間を揺れ動く何物でもない何物かこそ 長い間心 胸 頭等 実体化して呼び慣わされてきたものであろう。反対に他者に相対して この系が 私自身であるように思われることがあるのは この何物でもない私との分離が 容易に消失し 私と関係系とが 一挙に重なり合うからである。けれども 私は この場合私=對他を失って 直接に他者との関係裡にのめり込み 私と他者との区別もつたないままに 混乱しつくし 後に再び自己に復帰した際には この関係系を 私ではないもの と見做さなければならなくなってくる。そうならないまでも 他者=まなざしの消失は 同時にこの系を 存在の水準から

おろし 私は、そこに空虚なる場を 意識しないではいられなくなってくる。事実 恋人との充実していた日々の中で、また賑やかで楽しかった人々との交際の後で ある朝突然 世界が空しく思え 自分自身が 不安のただ中におかれていることに気づく時 姿を現わしてくるのは この空虚さである。反対に 絶えず他者の関係が織りなる状況に、私を縛りつけておくことは この恒常性を 存在の水準で確保しようとする努力を表わしている。そこで この非措定的意識には 何物かとして暗々裡に映じ 他者に対しては恒常的に存在せしめられ 反省には欠如と化して消失する関係系のうちに 私との分離の根拠を求めることができそうである。というのは反省に際して現われてくる欠如こそ 実は分離自身の本性であり 私系ではないことの意味であるからである。あるいは 私が この系=対他でないことが知られるのは ではないこと 即ち分離が 反省に際して欠如となって映じてくることのうちに 即ち非反省的には暗々裡であった何物でもない分離が いわば拡大されて空虚を構成し この空虚が 同時に対他の消失を導く過程のうちにおいてである。更にこの分離は《でない》否定性の源泉でもある。この意味では 対他は 私によってであるにせよ 他者によってであるにせよ この分離に距てられて 存在させられ 意識されることになるので その意味では 絶えず恒常性と無常性の間を さまよっていることになる。つまりあそこを否定して自らを立てるここ ことの不在の下に現われてくる欠如は 意識の否定性のある現われであり この否定性こそ 反対に意識されるものを ある時には定立的に またある時には 非定立的に立てる と考えられる。ところで《私は 対他ではない》という分離意識は すべての他人との関係に際して しばしば現われ 私と他者との間で直接的で 相互主観的に連続し合う関係の背後で常に暗々裡に働き ともすれば一直線に関係し合おうとする私を 手綱を引いて いましめている。けれども この論理は、サルトルの自己欺瞞や不安などの論理と同じであり 殊更に相互主観的なものとして 強調

するまでもないのではないかと云われるかも知れない。事実否定性の構成は酷似しているように見える。けれどもサルトルは他者が附与し規定する存在との関係裡に否定の由来を求めず、いきなり対自のふところに否定を立て、次いでそこから欠如を導き、他者の規定する関係＝状況と切り離して不安や絶望を認め、他方他者を他者として、まず一気に対象的な水準で語ったために、他者は対自の意識の否定性にも、またその構成自身にも、何の寄与もせず、私から孤立して、その現実との深い関わりをも失なうことになった。それだけではない。私が他者ではないという否定の定立化された形態と、私の意識の欠如性との区別も、相関性も導出できなかったところから、欠如分を全体化に向けて完成しようとめざす美や絶望の追究においても量や価値、道具等が、関係＝相互主観の水準で現われて来なければならない時にも、他者を全面的に排除して、外面的無をそこに樹てなければならなかった。むしろ彼が心的反省の章で語ったように、彼の主張する存在や無自身が、他者を自己のうちに採り入れ、そこに立てた観点から存在させられた心的な表象であったと考えられる。

ところで、他者におけるまなざしと眼、意識と身体のなす二重性は、そのまま私にもあてはまるだろうか。他者の場合には、その意識を不在または欠如として捕えるにしても、それを身体から分離してしまうことは不可能である。そこでは存在と欠如は相互に独立しているどころか、欠如したかぎりでの存在、存在の背景の下における欠如しか観察されることができず、この対立的な表現すら、両者の一体性を、両極に向けて引き離れた結果とられた、いわば仮定的な操作である、と述べることもできる。更に彼の身体から彼の対他存在を直接に導き出すことも困難であろう。むしろ彼の身体や言葉、表情等を通して、私は彼にとって彼の対他存在が、どんな意味をもっているのか、推測するのであって、決して身体＝対他となって直接私に映じてくるのではない。反対に私の場合には、私の対他存在は直接に外部＝身体を導きはしない。成程私はよく見た

めには顔を 時には身体全体を動かさなければならないし 眼鏡やレンズ等を利用することすらある。その場合に 見る事が私において局限化され この局限化が 見るための条件 または媒介性を 私の視野の形態の上に反映し 指示することもある。更に手足に関してであれば 多少なりとも他者の観点に立って 私は 私の外部を眺めることができる。体操の訓練に際しては このことはより明確になってくる。けれども ここで問題なのは あくまで私の意識であって この意識の動きを それが局限化された形態 または領域が示す身体との関連において捕えようとする時 身体=外部が 姿をのぞかせてくるというに過ぎない。したがって 私の場合 私の対他存在は かぎりなく外的=身体に近づくが 決してそれを全面的にかつ直接に知覚することができない。このことから まなざしや意識が 対私的には 身体から独立して それ自身としては 何物でもないことが知られる。事実意識すること自身は 欠如も存在も意味しない。また 欠如や存在は 対私的には 統覚や対他存在との関連において現われて来るが 身体の外部性との関連において捕えられることもできない。

こうした二重性は、先述した距離と点 何物かと何物でもないものの二重性に関わる困難さに 私たちを導く。まなざし=眼の二重性 即ち何物でもないかぎりでの何物かは 一方では 眼=身体から 大きさを暗々裡の前提とする存在知覚を 他方では まなざし=意識の欠如性から 何物でもないことの欠如直観を導く。眼の奥底できらめくまなざしを点として何物でもない何物かとして 二重性の廃棄の下に捕えることもできる。存在と欠如との間で 分離は 何物でもないのに 何物かとなって拡がってくる。この拡がりには まなざしの後退と眼の出現との間で現われてくる。即ち他者のまなざしが 一挙に私に存在を附与した時 私の対他とまなざしとの間には 媒介項は全くなく 私は他者ではないという意識すら もつことができなかつた。けれども まなざしの後退は 今度は眼=身体を現われさせているだけではなく 私が他者=身体ではないことを教え 媒



介すべき何物もなかったそこに 媒介項としての空間を 出現させている。この空間は 私が彼ではないことの現われである。反対に空間の消失は 私と彼=まなざしとを 見られていることの意識の下に 一体とさせる。すると空間は まなざしが 生みだし かつその後退の下に現象してくるものと定義することができるだろう。彼の意識が顔や手足等の動きを通じて指示し 実現する そこ・あそこに 彼は 自己をまき散しくり拵げ 空間を形成する。何物でもなかったまなざしに とって代って 眼はそこにある。眼は実在する。つまり 何物もなかったそこに 何物かが 眼や空間となって出現し、関係=不在が 関係=存在に転じ、相互間で強化されていたまなざしの軌跡として 直線が 距離を伴って出現する。点=不在が 点=実在に転じるな否や 不在=関係は 直線という関係に変わって距離を生み出す。事情は 他者自身ではなく 他者があそこ・そことして私に示される場合にもあてはまる。即ち 他者を暗々裡な前提とするあそこ・そこが ここでないことは 両者間において生みだされる空間となって 現われてくる空間は 《ではない》ことの実現であり 意味としての分離の現われである。その意味では 単に空間と呼ぶより 量的空間あるいは量自身と呼ぶ方が適切であるかも知れない。というのは 問題となっているのは まなざし一般ではなく 眼という場に徹底して縛りつけられているまなざしであり 意識によって形体化され規定されている空間であり その二重性のうちで 存在とも不在とも述べ難い 何物でもない何物かの現象であるからである。即ちいわゆる空間と異なって それは 形体化されて 現象し あそこそことの関係となって私に直観されることができる。それは あそこそことの間の比較において 距離的な遠近を構成し 大きさとして捕えられる。大きさは より先とより後との間でより前とより後との間で 比較のうちに姿を現わしてくる差異性自身である。その意味では 量にせよ 大きさにせよ 決して空間そのものではなく 時間量にもあてはまる。まなざしが文字を右へ右へと追って 意識が

意味を具体化し 手がそれを描きだしてゆく動作において 一字一字は  
より右へ より下に 量を具体化し 拡大してゆくが、意識は 常にそこ  
をここに 未来を今に変えて たえずここと今との一致の下に 過去と空  
間とを生みだしてゆく。より右は 一瞬後を より左は一瞬前を 私に告  
げている。そこでは 時間にせよ 空間にせよ 制約は 今とここを中心  
として 過去と未来に あそことそこに 形体化される。まなざしと眼と  
が切断されることができないように 量は 形体から離れることができな  
い。成程対私的に私は 私の身体を忘れて 遠くを望み 未来を想うこと  
ができる。けれども 見ること 触れること 更には実現することは そ  
れらが局限化されている形態を通して 私に私の身体を示唆する。私が  
私の眼を右へ右へと走らせるのは 私のまなざしが 1点だけに 今とこ  
所に凝縮されていることを意味する。私を観察している他者は 私が私の  
2つの眼の焦点を 一点で合わせているからだ というかも知れない。事  
実措定することは 眼の焦点を合わせることに対応している。ところが  
この措定することと 漠然と全体的に拡がった非措定的意識の非形体性と  
の間のちがいは 制約の少ないまなざしと 身体の他の 諸部分との間で  
は 更に拡がっている。まなざしは 瞬間的に遠くを見 将来を夢見る。  
けれども 身体に局限化され切った眼や手足を通して まなざし あるいは意識は 遠く  
のあそこを ここに変じようとして 極めて低速度に動く。意識が どれ程遠くを望む  
ことができても それは身体という1点に制約されている。この1点は 例え  
ば一歩一歩となって まなざしの指示したあそこをめざす。あそことこことの  
間で 距離は 大きさと映じ 点=私は それを減じてゆく。まなざし=直線と 私=点  
との間で 追われるものと 追う者との関係が成り立つ。長い階段や 駅の  
プラットフォームの白い点線の上を歩く時 まなざしは 目標とこことの間で  
連続しているのに 点=私は 一段一段を 1点1点を いわば不連続化しながら  
変えてゆく。たしかに 前の点を後の点から分離しているものは 何物

でもないし 漠然としたそこは ここから明確に区別されるわけではない。前にさしだす右足の一步は それを追い抜く左足の一步との間で どんな断絶も作っていない。けれども 1つの段は より下の段ではないしそこはここではない。同様に駅に向って歩く私にとって 見通される道標や曲り角だとか ポストや橋などは 前を後から切断する静止点であり 目印しであるが それを通過してゆく私にとって 分離するものは何もない。そこで明らかなことは 距離を構成し 大きさを生みだすものは まなざしと身体との二重性における何物でもないものが 何物かとなってゆく過程のうちに潜んでいる ということができる。まなざしは 彼方に向けて連続的直線を拡げ 点=身体は それを不連続的に破壊し 構成してゆく。今とここ 前と後 先と後 を措定するかぎり 私=身体を大きさを捨象した点と考えるかぎり この二重性を消すことは不可能である。また考え方を変えて 道標としての諸々の点を運動にとっては外的な静止点である と見做すこともできるだろう。けれども そのように考えることは 距離から その規定的形体をはずすことになり、距離一般 量一般を問題とすることになる たしかに ある意味では 問題なのは 距離でも量でも運動ですらなく 運動以前 量以前であり、何物でもないものが なぜ何物かに変じてゆくのか ということである。非措定的意識の水準でかすかに示唆されるように 何物でもないものは 何物でもないがゆえに 到るところに拡がっており どんな規定も受けない。事実まなざしが一挙に遠く彼方や未来を見ることができるのは この何物でもない性格のためである。けれども それは 何物かのうちに住んで 今やここに制約されている。途端に この制約によって 量や大きさが 運動や移動が生みだされ、何物でもないものは 何物かの束縛の下に 自らの本性である拡がりを実現しようとする。つまり 運動は 運動以前の水準では 意識そのものであると考えることができる。その実現は 意識が身体に住むところから 点と直線との解決しようのない矛盾を解決すべく 要請され

た と解釈されるだろうけれども、こう考えることは 何物でもないものを無に 何物かを存在に拡張することによって まなざし=眼において分離し難く結びついている二重性を 遠く形而上学的考察に向って破壊することを意味するだろう。

以上の考察は 反って措定することの意味を明確にしたように思われる。つまりここで問題なのは まなざし=眼であり ここと一瞬に制約された意識である。ここや今を立てること自身が 措定することの本性を明らかにしている。措定は 何物でもないものから何物かへの移行を意味し その対象を 不在から存在に転じる。それは 対象を1なるものとして点として 一切の性質や形体を捨象する方向に向けて 存在化せしめる。そこで点として それは 不在から存在に移行し 《である》《がある》という述語規定を受ける。人は 決してその非存在の可能性のないところで 存在を云々しはしないだろう。その意味で 点は 何物でもない可能性の下で 何物かとして存在せしめられる。事実私たちが通常他人に対して直接にとる立場は この立場であり 他人は 存在とも不在ともつかぬ形で現われている。また事物を形体化し 他から切断して 1なるものとして立てる時も 命題を 定義して 1命題として立てる時も事情は同じである。要するに ここで立てられたものは あたかも数が 例え集合数として 一定の大きさを具えてはいても 単位数としては1であるように大きさや内容を具えて かつ捨象されている。けれども こうして1なるものとして 存在の水準に出現してきた点は 丁度 眼がたちまち身体全体に拡がり 次いでそのくり拡げる空間にまで向うように たちまち大きさを帯びてくる。何物かと 何物でもないものとの間をさまよっていた点は 大きさのある ある物となっている。1として措定されたものが その内部で多へと分裂する。

そこで 形体と量のなす関係が 主観相互の間で どんな形をとるかが考察されなければならない。先述した運動の場合 距離は まなざしが狙

った点が眼界づけている直線に対して 点=私が この直線を自ら具体化しようとする時に現われた。云い換えると 意識は内的な連続化と 外的な形体化 または規定を一挙にめざし 次いで単位としての点を通じて 同一性とその否定としての差異性を具体化し 全体の再構成をめざす。その時形体は消失し 量が 構成されるべきものとして現われてくる。ここで同一性は 例えば単位としての数を表わすが 数に生成的な要素を認めることによって 即ち差異性への移行を許し 何物でもないものの何物かへの転換を許すことによって 集合数へと変容が可能となる。事実古代に 3角測量が可能になったのも 巨大な建築物が構築されたのも 一方での形体によって規定された連続的なものの内部で 他方で 点を単位とする量の 生成的 あるいは運動的な再構成が 対応して実現されたからである。その意味では 量は 常に二重性に裏づけられた生成量 あるいは運動量である。それは 各部分において形体による規定 同一性に封じ込めようとする規定を 生成しようとする傾向によって打破しようとする。この規定と量との相克は無限分割に際して典型的に見られ 分割を重ねれば重ねる程 最小なはずの同一点は その内部に差異性を示して更に分割できることを教えている。こうした形体規定と量的拡大の相互関係は 実はまなざしと眼の二重性 及びそれに対する主観との関係に由来を求めることができるようなものである。他者のまなざしは 私に新たな存在を附与するが 見られている意識の下で 私は 彼ではない と意識することすらできない。続くまなざしの消失は そこにかかっていた霞を晴らし まなざしの跡に 眼が定立されて存在する。それは 球形をなす2つの輝きとなって そこにある。それは 私ではない。けれども 再びまなざしが 私に浴せられるな否や 球なる眼も そこに拡がっていた空間も ともに消え失せてしまう。問題なのは 私と彼との間の分離と連続に対応して現われてくる空間の生成と消滅である。私は あそこ・ここに 数多くの事物や動きを観察し 遠近や大小の織りなす私の世界を見ていた。それ

は 例えば道として 歩くべき私の可能性を もぎ取られるべき柿に向けて 手をあげ体を延ばすべき私の可能性として あるいは球技において 首や体を左右前後に回転して球を奪い取る可能性として 私に示されていた。私の身体の局限化の制約の下で 自由であることが 私に私の空間を展開することを可能にしていた。いわば身体の諸部分とともに まなざしがあそこ・ここに規定する限界に対し それを実現しようとする身体が生みだしてゆく量が 対照化されていた。突然に襲ってきた他者のまなざしは 私の空間とそこに基づく私の可能性を 即ち 私の運動と将来とを奪い去り 私を今とこのうちに凝固させる。観点を他者に動かして観察しよう。私が眼を 即ち2つの球を見たことは 規定=形体化を行い 眼とまなざし 眼と身体の他の部分との間で 切断を介入させたことを意味する。まなざしを奪われ 空間や可能性を消滅させられ 眼は 形体化されてある。形体は その存在欠如である眼界線をめぐって 形体化する意識と形体化されるものとの間で 関係=絆を実現する。つまり 形体化することは そこに私の意識を介入させ 具体化することを意味する。そこで球形=眼は 私の意識の具体化でもある。こうして一方で他者を規定しながら 他方で私は 私の空間を展開し 私の可能性を拡げている。けれども こうした典型の場合ではない 通常私たちが 対等という形で互いにとる態度 即ち眼とまなざしとの両立の下に対し合う態度では 形体化は 暗々裡であり 身体とそれを取り巻く空間との間に分岐線を描きだすどころか むしろ意識がくり拡げる空間の点的な場として 身体を中性的に捕えている。実際ボクシング等の場合に典型的に見られるように 意識存在は 帰すう中心としての不在点が 系列をなして拡げている身体=空間であり 人々が互いに競うのは この空間を狙ってである。この空間は 時には言語等となっても現れることもあるだろう。このことは 恋する者同志の関係において 恋することが 恋されたいことの意味であるがゆえに 恋する者は 相手を形体化することが したがって不在な相手

の顔を 想い描きだすことができない場合に 典型的に表われる。形体化する事が 相手から そのまなざしの能動性を 私を恋する可能性もろともに奪い去ってしまうからである。そこで 空間=可能性だけが 相手に与えられている。こうして 相手を形体化する意識と 自らを量的に展開しようとする意識との相克こそ 主観相互の基本的関係である。この規定化と量化をくり返すことにより 更にこの関係が多数なる他者一般の關係にまで 拡大されることにより 空間は 相互主観的關係から 時には恒常性の凝固したいわゆる客観的空間に移行することもある。關係=分離は そこで実在に移行し絶対空間と化す。実際 経験認識の弁証法的展開のある帰結である關係系や空間は 決してア・プリオリなものではなく 存在と非存在 意識と無意識との間を往き来している。反対に安易な客観化は 無意識を意識へ 恒常性を普遍性へ轉換させるばかりではなく 私の対他を即自存在へ 空間を外面的無に 意識存在を自我へ 固定してはめ込むことになる。この二重性は 決して 最終的な綜合のうちに揚棄される種類のものではない。反対に この綜合への努力こそ 普遍化をめざす 数多くの人間的な企てを生みだしている。そこで最後に この關係系の同一性への傾向が そのふところに生じてくる差異性に関連して どんな現象を生みだしているかを見てゆこう。

まず第一に認められなければならないのは 相互主観性の恒常性は あたかも 眼に起きるまなざしが その何物でもないことのために たとえ存在化されても 欠如の透明性をとどめているように、その存在化され多様に形態化された枠のうちで 透明な無差別性を保持している という点である。この無差別性は 差異性が 主観相互間において比較に移行し質的同一性を生みだした時 この同一性のうちに全面的に拡がっている。比較は 空間的な自己拡大と 他者への形体規定とが相互に織りなす關係であるから その背後に形体化された空間を 独立化させる傾向をもつ。この相互比較の無数な項の展開のうちで 形体化された空間は 形体化さ

れた量となり 質的同一性から無差別性へ移行する。けれども この量的無差別性は あくまで主観＝意識に依存して 存在化されているから その恒常化のためには 何らかの形で実在化されることを要求している。実在化は 形体化され 個別化されたかぎりでは 無差別的であり 連続化されて実現されなければならない。さもなければ 比較に際して 連続性と個別性の二重な要求に応じることができず とても基準として働くことができない。こうした二重性の下で いわゆる量的基準は 誕生することができる。例えば 数の場合は この二重性を兼ねているが 更にデカルト座標に見られるように 図形との間にまで 相互置換性を具えている。量は その多様性の下に現象して 単に力や価値ばかりではなく 強さ 激しさ 美しさ等となって 私たちの世界を相互に置換し合うことのできるものになっている。こうして量は その到るところに二重性をまき散しながら 出現と消失 生成と消滅との間を往き来する。それは 量に先立つ無差別性の水準で 欠如 不安 絶望 美 言語等すべての領域に 形体とともに透入し それらの普遍性のにない手となっている。相互主観性の領域において 意識存在は 形体並びに 量の諸形態のうちに 典型的に表現されている ということができる。

—続く—



## De la négativité au niveau de l'intersubjectivité

*Michio Mizuno*

### Résumé

Dans la coexistence de la regard avec les yeux, l'apparition pleine du regard de l'autre, m'indiquant l'extérieur, me fait être conscient d'être regardé. Alors ce regard me fait disparaître les yeux de l'autre ainsi que l'espace ou la distance entre moi et lui, de telle sorte que rien ne me sépare de lui et que la continuité presque complète s'établit entre son regard et mon extérieur. Le recul plein de son regard, d'autre part, me fait apparaître ses yeux comme son extérieur qui s'étend jusqu'à son corps. Il s'agit donc de la dualité de rien dérivant du regard avec quelque chose dérivant des yeux. Puisque rien ne sépare entre rien et quelque chose, il en résulte que la séparation entre la conscience et le corps dans l'autre, entre la conscience pour soi et celle pour autre, entre son regard et mon extérieur, doit être imperceptible. Il en est de même de l'espace comme le signe de cette séparation. De cette qualité neutre de ce rien apparaît la négativité sous la forme "Les yeux ne sont pas le regard" ou "Je ne suis pas mon extérieur". L'être conscient se trouve suspendu dans cette dualité affirmative ainsi que négative de rien.

C'est cette séparation imperceptible qui fait exister la distance ou la quantité limitée par le regard. Cela résulte, par exemple, de ce que le corps conscient vise à reconstituer thétiquement ou pas à pas la totalité qui se trouve limitée par le regard non thétique. Mais le corps conscient, caractérisé de nature par la dualité délicate de l'identité avec la différence, tend à la discontinuité dans la réalisa-

tion de la totalité continue formée par le regard.

Enfin l'espace, développé par la conscience et limité par le regard de l'autre constitue la quantité déterminée. En effet c'est la forme qu'on me regarde dans les yeux et qui me détermine comme, pour ainsi dire, être-en-soi, tandis que la conscience, se développant contre la forme déterminant, essaie de se réaliser comme la quantité.